
母さん、ごめんね

シェール

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

母さん、ごめんね

【Nコード】

N1226M

【作者名】

シェール

【あらすじ】

高校卒業したら大学に行って良い会社で働いて親孝行する！・・・これがわたしの小学生のころの夢だった。現実はどういと、病気また病気・・・。母さんはどんなときもわたしの味方でいてくれた。病気ばかりしてごめんね。

夢

わたしの夢は

高校卒業後

大学に入学し

きちんとした会社で働き

親孝行することだった・・・・・・。

お給料をもらったら両親にあげよう。喜ぶ顔が見たいから。

もうすぐ30歳になる。

わたしは

18歳のころから病気ばかり。

大学受験どころではなくなった。

あのことろ

病院をハシゴし

状態は良くなるどころか悪化し

入院までした。

18歳。みんな大学受験のために猛勉強。

わたしは病室で病気と戦った。

やぶ医者だったとはつゆ知らず

何度も検査。

18歳、大学受験ができないわたしの人生は終わったと
その時あきらめた。

何これ???

休日。

家でテレビを観ていると

ぐるーっと物が回って感じた。

「これはヤバイ！」

天地が引っくり返るかと感じ、テーブルにしがみついた。

わたし.. 「何これ??？」

父さん.. 「??？」

わたしはその場に寝転がった。それが「メマイ」だった。

動けないほど。歩けないほど。

すぐに母さんが病院へ連れて行ってくれた。

わたしは自力で歩けなかった。

母さんが腕をつかんでくれていた。

先生は

「疲れただけでしょう」

と言った。

数日寝て薬を飲んでも治らない。

何の病気？

母さんはわたしを何軒もの病院へ連れて行ってくれた。

休学

わたしは休学することになった。

高校3年という大事な時期に休むなんて考えられないと散々言われたけれど

歩けないから学校に行けなかった。

わたしが病院めぐりをしている間、
学校から家に何度も電話がかかってきた。

担任…「○○さん（わたし）はいますか？」

母は頭を下げながら

「娘はまだ病名がわからないので、すみませんがもう少し学校を休ませてください」

と言っていた。

それでも学校側は「本人と代わってください、本人と話したい」と主張した。

わたしは起き上がった。吐き気がした。
電話に目をつぶったまま出た。

担任..「出席日数を考えて。大学受験はどうするの？」

わたしは一気にいろんな質問をされてわけが分からなかった。

とにかく謝って

良くなるまで休学させてくださいと言った。

だが1週間後にまた電話。

まだですか？

いつ来るんですか？

わたしの病状は悪化していった。

病名

わたしがなぜこの小説を書いているかというと

今いろんな病気を抱えていて

そのせいで母もうつ状態になってしまったから。

わたしの病名はメニエール病、自律神経失調症などと当時はいろいろ言われた。

そしてあのころから今までずっと原因不明のメマイが続いている。

今でもね

死にたくなるんだ

自殺未遂をして何度も病院に連れて行かれたけど、

何が起こったかわからない。

だから

今、正常な今のうち

母に感謝の気持ちとごめんねってことを

この場を借りて伝えたかったんだ。

わたしが診断されたうちの病名の1つ

「うつ病」

についても知って欲しいと思って・・・。

メニエール病、うつ病

今、わたしは大きな病氣主に3つと戦っている。
だから文章は下手。ごめんなさい。
右手がいうときかないから。
読みにくかったらごめんなさい。

18歳のころの話に戻ります。

幼いころからお世話になっていた耳鼻科の先生が

「メニエール病」

と診断した。

絶対安静にしないと言われて、
その先生の治療法は

3日間ベッドにすること。

食事とトイレ以外は寝ておけ。

ラジオもテレビも携帯も読書も音楽もだめ。
というものだった。

2回目の診察のとき、その先生にあらゆる質問をした。

「メニエールって再発するんですか？ 治らないんですか？」

などなど。

先生は

「再発はします。でもあなた、うつ病も入ってるみたいだね」

と言った。

わたしはその時初めて「うつ病」という言葉を聞いた。

眠れない日々。メマイが続いて吐き気がする。

退屈。

学校からの電話でストレス。

母さんと初めて心療内科に行った。

家族の中では反対するものもいた。

心療内科といえども、当時はまだまだ敷居が高かった。

メニエール、うつ病 2

寝る前のお薬をもらった。

だけどメマイは止まらない。

薬を飲んでも、夜中に目が覚める。

先生に薬を変えてと言う。

今度は悪夢を見る。

もう寝たくない・・・・・・。

そうやって不眠症になってしまった。

これがきちんと薬を処方できる医者だったら、また違ったかもしれない。

学校からどうしても来いと言われた。

わたしはどうしても行けないと言った。

担任は出席日数が危ないと言った。

ようやく歩けるようになったのは3ヵ月後。

仕方なく行く。

だけど途中で気分が悪くなる。

学校に電話する。

わたし…「○○（名前）です。お腹が痛くて行けません」

担任…「またなの？ 来るだけ来なさい」

学校に着いて授業を受けている途中、メマイがした。

「先生、気分が悪いです」

クラスメイトも先生も「また？」と呆れていた。

だけどこれがメニエール病なのだ……。きちんと治療しないところなる（のだと後々思った）。

どうしてわかってくれないの？

わたしは健康になりたいだけ。

母さんに相談し続ける日々。

母さんは学校に電話して相談する。

毎日のように母さんはわたしの不安な気持ちを聞いていた。

毎日、いや、毎時間、毎分・・・。

ある日のこと。

いつものように母さんに言う。

「母さん、わたし、元気になるかな？」

わたしは母さんの顔を見た。

顔色が・・・！

暗くなっていた。

とっても。

色に例えられない。

疲れが出ていた。

わたしのせいだ・・・。

弱音を吐かない母さんは、「大丈夫。良くなるよ」と言ってくれた。

だけど

これ以上苦しめたら迷惑だなんて思って

ある朝、学校に行く途中
いつものように学校に電話して

「今日は休みます」

と言った。

公衆トイレに行ってドアを閉めた途端、大声で泣き喚いた。

ごめん、ごめんね。

わたしがいなくなれば、

みんな楽になるでしょ？

そう思いながらその場で………自殺未遂した。

臆病なわたしは

生き延びてしまったんだ・・・。

死にたい 死なないで

何度も自殺未遂した。

何度も家族が駆けつけて病院に連れて行ってくれた。

「なぜ？」聞かれてもわからない。

ただ、みんなのためにいなくなったほうがいいと思ったから。

高校は無事卒業できた。

あちこち病院を変えた。

今でも発作的に死にたくなることがある。
これは別の病気が原因なんだ。

母さん、

わたし

病院代ばかりだね。

薬飲んでばかりでさ。

ごめんね。

父さんもごめん。薬代払うために働くなんて
イヤだよね・・・？

しかもわたしの病気は1つじゃない。

だから薬も何種類もある。

.....

高校卒業してとある学校に入学。

わたしは自分のことを知っている人がいそうで恐かった。
高校に行けない病気ばかりしてる人間、それがわたし。

オドオドしていたわたしに声をかけてくれた子がいた。
Kちゃん。

「緊張するよね？」

優秀で美人で誰からも好かれるような女の子。
白く透き通った肌、澄んだ眼。
芸能人みたいだった。

わたしとその子はすぐに仲良くなった。

だけど突然、彼女は亡くなった。

原因はわからない。

わたしはショックのあまり、涙が出なかった。

それでもう1人仲良くなった女の子がいた。
Nちゃん。

わたしとNちゃんは

つまらないことで喧嘩したんだ。

絶交してたんだ。

別の友達から最近メールがきた。

Nちゃんが亡くなったって。

わたしは実家の電話番号を調べてNちゃんの家に通話した。

Nちゃんはね

わたし…「〇〇学校でNちゃんと同級生だった者です」

そう電話で言っただけで涙が溢れてきた。

Nちゃんのお母さんは律儀な人だった。

Nちゃんの母…「そうですか、Nがお世話になったんでしょ？
お恥ずかしい話、まだ信じていないの」

え・・・？

あ、鈍くてすみません・・・。

Nちゃんが亡くなったこと、ですね・・・とわたし。

Nちゃんは生前、うつ病で苦しんでいたんだって。

わたしと同じだったんだ・・・。。

言えばよかった。

うつ病なんだって。

そしたらNちゃん、わたしに相談してくれたかな？

わたし…「わたしもううつ病なんです」

Nちゃんの母…「そうだったんですか？」

わたし…「はい。でも、人に言えなかったんです。偏見もたれるから・・・」

Nちゃんの母…「そうよね。まだそうよね。あの子も苦しんでいたから分かるわ」

恥ずかしながらわたしは泣き崩れ、電話口で

「Nちゃんとケンカしたままなんです」

と言った。

「あの子は許していますよ」

とNちゃんのお母さんは笑った。

「あなたは娘と同じ歳。苦しくなったり辛くなったら電話ください。ご家族に言えないこともあるでしょ？」

わたし…「でも……。おばさん、辛くないんですか？」

Nちゃんの母…「いいえ。これはあの子がキツカケをくれたんだと思う。あなたを助けてあげてって言ってるのよ」

わたしは悲しいような嬉しいような。

涙が止まらなかった。

そして何度もNちゃんのお母さんに電話した。
甘えてしまった。

いつの間にか本音を言えるようになった。

「死にたい……。Nちゃんが呼んでるんじゃないかな？」わたしは言った。

「そんなことあの子は言わない。あの子なら生きてって言うわよ？」
Nちゃんのお母さんは言った。

一呼吸してこう続けた。

「残された家族は辛いよ。今は考えられないだろうけど、お母さんもお父さんも悲しむ」

わたしは

「そうかな？　わたしはこれ以上迷惑かけたくないんだ・・」

と答えた。

Nちゃんの母・「お葬式するの、迷惑じゃないと思う？」

わたし・「んー・・・」

Nちゃんの母・「その後、ずっと戻らないのよ？　だから死なないで」

・・・・・死なないで・・・・・

この言葉だけは死にたくなったときに思い出して欲しい

どこかに住んでる遠くの誰かが言ってたような。

わたしたちは他人同士だけど

誰かが自殺するというのは、本当に辛い。

その人が病気で苦しんでいた、悩んでいた、自ら命を絶ったとしたら

もっと辛い。

だから 今

また ふと

死にたいと思うことがある人へ

わたしからのメッセージ

死なないで。

母

うつ病の治療はとてもつらい。

このままなの？

いつまで？

と考えてしまう。

母さんまでうつ状態になってしまった。

ごめん、本当にごめんね。

わたしはもうすぐ30歳。

明日は神経の病院。

来週は心療内科。

その次は婦人科。

毎週病院に行っている自分がいやになる。

わたしが行けないときは母さんが薬をもらいに行ってくれる。

母さんが運転してわたしを連れて行く。

自分の人生を楽しみたいだろうに

わたしのせいで

ごめん。

先日は父さんが落ち込んでいた。

母さんは「外食しよう!」と言った。

わたしは長時間外出はできない。気分が悪くなるから。
人ごみも無理。

そうなると行けるお店は限られてくる。

母さんは静かなお店を選んでくれた。

帰り道。

父さんが車を運転。

助手席に母さん、後ろにわたし。

母さんが言った。

「今が1番幸せ」

母さんは子供のころに両親を亡くしている。

叔母夫婦に育てられたがイジメにあったと言っていた。

母さんは言う、

「夜寝るとき、どんな夢を見れるかが唯一の楽しみだった」と。

わたしは病気ばかり。

それでも

こんな子供を持っても

今が不幸って思わないでいてくれるのかな？

母さんは明日、またわたしを病院に連れて行ってくれる。

ありがとう

いつもありがとう。

そして

本当にごめんね。

わたしは

健康な人が羨ましい。

e
n
d.

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1226m/>

母さん、ごめんね

2010年10月8日14時00分発行